

Heinz Vater :

*Das System der Artikel-  
formen im gegenwärtigen  
Deutsch*

三 城 満 禧

1963年にNiemeyerから出版されたこのMonographieは、共時的な観点からドイツ語の冠詞を集中的に扱った数少ない試みの一つである。冠詞については、従来、詳細なものとしては、Behaghelの《Deutsche Syntax》の一章があるし、簡潔にまとめたものとしては、Dalの《Kurze Deutsche Syntax》などがあげられようが、いずれの場合も、Vaterの指摘をまつまでもなく、その視点はつねに個別的であって、類似した意味をもった形態がある時代に分業協同して、ある一定の機能を必要かつ十分に果たしているという側面から対象をとらえようとする、いわゆる共時的な問題意識が稀薄である。通時的な研究も、しかし、従来のように一つの言語形態を個別に縦に通してみようということだけでなく、たとえばWeisgerberなどの提唱するように、各時代において輪切りにされた、その断面のsynchronischな研究のさらに各時代相互間の比較研究でなければならない。立体を垂直な線の集りと見ないで、水平な断面の積み重ねとしてとらえようというのである。その断面には、そうすれば機能分布の異なった様相がみてとれるにちがいない。共時・通時を問わず、Feld〈場〉の理論の方法が適用されなければならないということであろう。そしてFeldの理論というのは、けっきょくHjelmslevのいうvariant〈異体〉分節を意味の次元にまで拡張するというにほかならない。

Vaterがこの論文で試みようとしていることも、構造主義的な姿勢を示したEinleitungをせんにつめれば、けっきょくArtikelmorphem〈冠詞形態素〉を対象にした、このようなfeldtheoretischな考察ということになるのであろう。

本書は、大体三部からなっている。第一部(第一章)は構造主義的言語理論の骨子を、覚え書き風にまとめた部分である。第二部(第二章、第三章)では、冠詞の定義が試みられている。第三部(第四章、第五章)は、この論文のいわば中核をなす部分であって、種々の冠詞形態の意味・機能のidentificationとその記述にあてられている。このうち第一部にあたる部分は、本書の有機的構成という点からは、かならずしも必要不可欠というものでなく、むしろKommutationという方法論上の概念を導き出すためのExkursという性格が強い。

第一部の論述にあたって、VaterはHjelmslev, Bloomfield, Hockettなどに多くを負っているように見受けられるが、ここで展開されているのは、IC〈直接成分〉分析までであって、transformational-generative grammar〈生成文法〉には言及してない。

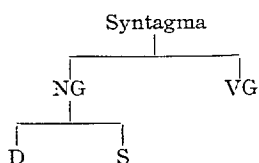
Vaterは、この第一部で、言語の本質をKommunikation〈伝達〉にあるとし、その機能を果たすものとして、Sprachzeichen〈言語記号〉をまず問題にする。言語記号が、Ausdruck〈表現〉とBedeutung〈意味〉という異次元の要素から構成されていることは、Saussureのsignifiant, signifié以来のことで、格別新しいことではないが、VaterはむしろHjelmslev(“Prolegomena to a Theory of Language”)のexpressionとcontentという二元論の影響をうけているようである。このことは、彼がやはりHjelmslevのcontent-formとcontent-substanceにならって、

Bedeutung の次元においても, Inhaltsform (内容形式) と Inhaltssubstanz (内容実質) とを区別していることからもうかがえる。(もっとも、それに対応する Ausdrucksform と Ausdruckssubstanz の区別には、本論に直接関係がないためか、ふれていない。) Bedeutung というのは、したがって、Vater にとっても Hjelmslev 同様、「ある言語表現を、一定の明確な境界をもった事態群に関係づける可能性」のことである。Inhaltssubstanz というのは、それに対して、可能性としての Form が適用され、その結果指示するようになった、その事態群にいわば潜在するその時々具体的な事物のことである。したがってこの Inhaltssubstanz は、言語外的なものである。Weisgerber が, Bedeutung と Inhalt との区別にこだわる根拠もここにある。彼のいう Bedeutung がすなわちこの Inhaltssubstanz であり, Inhalt がほかならぬこの Inhaltsform に相当する。

Vater の本書における主要な分析武器は、Kommutationsprobe (換位・置換テスト) である。Kommutation というのは、英米の言語学では commutation ないしは, substitution と称されているが、この概念も源はやはり Hjelmslev であろう。すなわち、「表現の次元における変化が、意味の次元における変化をもたらす場合、そこに Kommutation が認められる」と定義されている。「Kommutation が認められれば」、そこには、二つの Variant ではなく、二つの独立した言語素, Invariant (不変体) が存在するとみなされるのである。このような置換テストによって得られる最少の意味ある単位的要素を, Vater は Morphem (言語素) と定義する。これは、Bloomfield の glosseme, Martinet (“Éléments de linguistique générale”) の monème に対応する概念である。Morphem は「意味ある」最少要素であるから、その下

限は「意味のない」Phonem (音素) ということになる。次に Harris 流 (“Structural Linguistics”) の Äußerung (発話) の定義 (「ある発話者によって発話され、その始めと終りに段落、休止のある記号の連鎖」と、それと密接な関係にある Syntagma (統合体) という概念が導入される。Martinet などは, syntagma を単に「monème の組合せ」と定義して、英米系の construction (組立て) と大差ないが、Vater は Syntagma を strukturierte Äußerung として、むしろ漠然と「文」に近い意味で用いているようだ。そしてこの Syntagma を層状に構成している成分が, immediate constituent と称され、ある Syntagma の一つの IC となりうる Morphem の集りを、Bloomfield にならって Formklasse (形式部類) と呼んでいる。(したがって逆に Formklasse を構成している Morphem が Form と呼ばれることになるわけであるが、これらの概念がそれぞれ Prolegomena における paradigm (系列) とその構成要素である member (成員) に対応することはいうまでもない。) 発話のさい、Formklasse の中から、一つの Form が選び出されることを Selektion (選択) というが、それには、semantisch (意味的) な選択と、文法的な、いわゆる Kongruenz (照応) とがある。

第二部では、IC 分析に基づいて、Syntagma が NG (Nominalgruppe (名詞句)) と VG (Verbalgruppe (動詞句)) に二分され、前者はさらに D (Artikel) と S (Substantiv (名詞)) に分けられる。(VG, NG などという用語には、Vater 自身も認めているように、Chomsky の影響がうかがえる。) 以上を図示すると：



となるが、ここで注意すべきことは、Sには、名詞を規定する形容詞句も含まれることである。このような手続きを経たうえで、Artikelは、あらためて「Dの位置に入れることのできる Morphem, 逆にいえば、Dという Formklasseを構成する Formen」と定義される。この定義にあてはまる規定詞として、Vaterは、der, einはもちろんとして、その他に、いわゆる無冠詞形として 0-Form〈ゼロ形〉, 所有代名詞, dieser, jener, aller, jeder, mancher, irgendein, irgendwelcher, einiger, mehrereをあげている。welcherはもっぱら疑問に使われる特殊なものとして、また solcherは形容詞であるとして、さらに ein jederと sämtlicherはそれぞれ jederと allerの Variantとして考察の対象からはずされている。keinもまた他と置換できない特殊な機能をもったものとして、別格扱いをしている。

以上のように定義された Artikelについて、1920年以後の文語でも俗語でもない標準ドイツ語を資料として、置換テストを適用しながら、それぞれの冠詞形のもつ distinctive feature〈示差(弁別)的特徴〉ないしは semantic feature〈意味的特徴〉を明らかにして、各形態の意味・用法の固有性を確かめようというのが、第三部のねらいである。音素論の領域で、Jakobsonなどが創始したこの distinctive featureによる分析方法も、けっきょくは、たとえば従来 Dalなどによっていわれてきた定冠詞・不定冠詞の generalisierend〈一般化的〉および individuali-

sierend〈個別化的〉な用法を、さらに一段精密に吟味していこうということであろう。このような冠詞類の semantic featureとして、Vaterは次の9つをあげている。(a) Gliederung〈構成性: すなわち有限の要素より成ること、つまり countable であるということ〉, (b) Vielheit〈多数性〉, (c) abgrenzende Gesamtheit〈排他的総体性: 発話の内容が、他と明確に区別されたその類全体におよぶこと〉, (d) Situationsgebundenheit〈状況依存性〉, (e) einschließende Gesamtheit〈網羅的総体性: すなわち発話の内容が、その成員全体にもれなくおよぶこと〉, (f) Distribution〈配分性: すなわち発話の内容が成員の全体だけにでなく、その個々にわたること〉, (g) Zugehörigkeit〈所属性〉, (h) Identität〈同一性: すなわち既知であることの確認と指示〉, (i) Bezug auf Nahes〈指近性: 話者に空間的に近いもの、直前に述べられたことを、とくに弁別して指示すること〉。これらの各特徴について、その特徴をもっていれば該当のアルファベットの小文字を書き、もっていなければその大文字を、また indifferent〈中立〉, すなわちその特徴について中和されて〈neutralisiert〉いれば対応するギリシア文字を記入するという形で、各 Artikelformの特性を一つの式で表示する試みをしている(たとえば、irgendeinなどは aBCδEζγHI であらわされる)。

Vaterは、一方ではすべての特徴を排除する keinと、すべてを許容する 0-Formを両極として、他の Artikelがその間に並ぶという構想をもっているとともに、また他方 113頁の表では、0-Formを軸として、各冠詞をその上側と下側に特徴の少ないものほど真中に集中するように並べている。その結果、もっとも性格のあいまいなものとして derと einが 0-Formのすぐ上とすぐ下のところに並ぶ。この両冠詞の特性の稀薄

さと頻度が比例することは、きわめて自然のことかもしれない。

0-Form は, Vater のいうように確かに概念の単なる Vorhandensein 〈存在〉を表わす——これはすぐれた解釈だと思う——無性格なものであるが, Austauschprobe を主体とした分析の過程で, しばしば Hunde und Katzen 式の対句を例として用いていることは, やはり適切であると言いがたい。対句を例を用いれば, ほとんどすべての場合——すなわち, その対句が同一物をさす場合を除いて——0-Form は, 他の冠詞形と置換することができるからである。また, この不備と平行するように, なぜ対句の場合は無冠詞形が多いのかという点についての考察がまったくなされていないものたりない。(同じように Er ist Künstler. のような文型, als のあとや, 抽象名詞を含む前置詞句で無冠詞となる機構——おそらく 0-Form の純粋な概念性によるのであろう——についての十分な説明もない。) 関口存男などは, その冠詞論において, 「掲称的用法」を無冠詞のもっとも重要な用法としているし, また Vater は O-Form の特性式として ABCDEF, abCDFH をあげているが, 概念を純粋に露呈させる無性格な 0-Form にとって, もっとも固有の用法は私見によれば次の 4 つであるように思われる。(◎を付したいわゆる総称的用法は, ein や der の場合と同じく発生的にみて, 二次的なものである。)

- i) 単数では, ① ABC $\delta$ F $\theta$ : Im Bassin war Wasser.  
 ◎② ABcDFH: Gold ist ein Metall.
- ii) 複数では, ① abC $\delta$ : Auf der Straße spielten Kinder.  
 ◎② abcD : Menschen sind sterblich.

このようにみえてみると, 0-Form というのはやはり ein にもっとも近く, フランス語における部分冠詞のように, いわば ein と相補的に機能する形態であると解釈せざるをえない。

Vater は, また im, am などの Kurzform 〈縮約形〉を in dem, an dem などの Variant として簡単にかたづけられているが, これはどうであろうか。der は同一性という feature については中立, したがって  $\theta$  であるのに対して, Kurzform はこの特性をもたない, つまり標識 H を有しているからである。あるいは, 逆に, 標識 h の性格が Vater の定義ではあいまいであるといってもいい。irgendein と置き換えられない, すなわち「任意ではない」という程度の意味なのか, dieser のもつような強い指示性を意味するのかははっきりしない。

Vater は最後に, 結論として, 『冠詞は, 名詞によって表現されている事態部類 (Klasse von Sachverhalten) の範囲 (Umfang) と構成 (Gliederung) を示す。その際, 範囲というのは, 「存在しない」ということから始まって, 「ある状況のもとで存在する」ということを経て, 「その事態部類の全体について存在する」ということまでにいたる。』というふうに関詞の機能を定義しているが, 0-Form, der, ein などの本来の冠詞についていえば, 動詞における Aktionsart 〈動作態様〉に対応するいわば名詞の Vorhandenseinsart 〈存在態様〉とでもいうべきもの——分析すればこれはその名詞の semantic feature として析出されるが——が冠詞によって顕在化・表現されるのではないであろうか。

Heinz Vater: *Das System der Artikelformen im gegenwärtigen Deutsch*, Max Niemeyer, 1963